＜研究ノート＞立山曼荼羅における地蔵菩薩の図像について
―立山山中の賽の河原・地獄谷を中心に―

石﨑　康弘

はじめに

地蔵菩薩は、奈良期に中国から伝わった『地蔵本願経』では、釈尊入滅後、弥勒菩薩が成仏するまでの無仏世界で、六道に迷い苦しむ人々の救済を、釈迦如来から委ねられたとされる。平安中期までは、他の仏の脇侍的な存在であったが、平安後期、戦乱・疫病などの深刻な社会不安の中、末法思想にもとづく浄土信仰が広まると、極楽往生が叶わぬ者は地獄に堕ちるとされたことで、人々は地獄の責め苦からの救済を、閻魔王と同体ともされる地蔵菩薩に強く求めるようになった。

立山は、修験者の行場の一つとなり、仏教における地獄の思想と日本古来の山中他界観とが結びついたことで、山中の地獄谷の殺伐とした景観が、地獄の世界に見立てられた。たとえば、立山地獄にふれた現存最古の文献である『法華験記』には「昔より伝へ言はく、日本国の人、罪を造れば、多く堕ちて立山の地獄にあり、云々といふ」とあり、都の貴族・僧侶のあいだで立山地獄が認識され、立山に行きさえすれば死んだ家族や友人に会うことができると信じられていたようである。そして平安末期には、歌謡集『梁塵秘抄』にみられるように、立山は日本各地の霊山･霊場とともに、修験の行場、あるいは観音霊場として知られていた。『今昔物語集』では観音菩薩とともに、立山地獄を舞台とした地蔵菩薩による亡者救済譚が登場する。このように、平安末期は立山地獄に堕ちた亡者の救済者は地蔵菩薩や観音菩薩であり、救済されて転生する先も阿弥陀如来の極楽浄土ではなく、帝釈天が住むとされる忉利天であった。

鎌倉期以降、立山では、山中の浄土を阿弥陀如来の浄土とする思想が強く表れてくる。その一方で、山麓の芦峅寺に閻魔堂が現存するように、十王やうば尊が信奉をあつめ、その後の近世における立山信仰の形成に大きな役割を果たしていく。

そして江戸期には、加賀藩の庇護のもと、立山信仰は、立山山麓の芦峅寺と岩峅寺の衆徒によって、加賀藩領域内をはじめ、全国各地に布教されて広まっていく。その布教内容の中核をなしたのは立山の地獄信仰であり、それと不即不離とされたのが、平安期から水脈のごとく流れる地獄抜苦としての地蔵信仰であった。地蔵菩薩は立山の本地である阿弥陀如来や芦峅寺のうば尊とともに、立山衆徒に伝わる古文書や「立山曼荼羅」に描かれるとともに、立山山中・山麓には地蔵の石像が数多く祀られていった。

本稿では、まず立山信仰での地蔵信仰を研究する基礎資料とするために、「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の場面を抽出し、整理を行う。次に立山地獄の原風景ともいえる、立山山中の賽の河原や地獄谷の実景を紹介する。そして立山地獄を舞台とした説話や絵画などとともに、「立山曼荼羅」に描かれた地蔵菩薩を紹介したい。

１　「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の図像

１－１　「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩一覧

「立山曼荼羅」は、現在52本の存在が確認されているが、地蔵菩薩の描かれ方は「立山曼荼羅」諸本で様々である。

下記の【表１】は「立山曼荼羅」諸本における地蔵菩薩が描かれた場面を、抽出したものである。なお、立山曼荼羅の分類および配列は、『新 綜覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］発行、2022年）に依拠した。

表１　「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩一覧

Ⅰ　芦峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅										
番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備　　考	地蔵菩薩の描かれた場面				
						賽の河原（構成要素）	二十五菩薩中	閻魔堂前	施餓鬼法要	その他
①芦峅寺の宿坊家と関わって伝わっている立山曼荼羅										
1		相真坊Ａ本	個人（立山町）	5		○地蔵・子・石・卒塔婆	○	○	○	
2		相真坊Ｂ本	個人（立山町）	4		○地蔵・子・石	○	—	○	
3		大仙坊Ａ本	大仙坊（立山町）	4	大仙坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子・石	○	—	○	
4		大仙坊Ｂ本	大仙坊（立山町）	4	大仙坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子（服）・石	—	—	○	
5		泉蔵坊本	円隆寺（富山市）	4	旧所蔵宿坊家の泉蔵坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	○	○	○	
6		善道坊本	立山博物館	4	旧所蔵宿坊家の善導坊の檀那場が三河国	○地蔵・子・石	○	—	○	
7	安政5年（1858）	宝泉坊本	個人（富山市）、立山博物館寄託	4	三河国西尾藩松平乗全の直筆。宝泉坊に寄進	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼２	○	○	○	
8	慶応2年（1866）	吉祥坊本	立山博物館	4	三河国岡崎藩主本多忠民が発願・制作。「静寛院宮御寄附」の識札	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼２	○	○	○	
9		立山博物館本Ｄ（旧・越中書林本）	立山博物館	1		○地蔵・子（裸）・石・卒塔婆・鬼２	○	○	○	
10		立山町本	立山町	4	芦峅寺長覚坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	—	○	○	
11		筒井家本	個人（立山町）	4	芦峅寺宝龍坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子（裸）・石・卒塔婆・鬼（金棒で子どもを刺し、血が滴る）	○	—	○	
12		龍光寺本	龍光寺（立山町）	4	芦峅寺日光坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子・卒塔婆	—	—	—	
13		稲沢家本	個人（立山町）、立山博物館寄託	3	芦峅寺教算坊及び福泉坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子（服）・石	—	—	○	
14		多賀坊本	個人（立山町）	1	岩峅寺多賀坊、芦峅寺吉祥坊おの婚姻関係あり	○地蔵・子・石	—	—	○	
15		佐伯家本	個人（立山町）、立山博物館借用	4	芦峅寺の百姓家に伝来	○地蔵・子・石・川	△※	—	○	※宝珠を持っているが錫杖は確認できず
②芦峅寺の宿坊家の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅										
16		大江寺本	立山博物館、大江寺（三重県鳥羽市）旧蔵	1	・折り畳み本形式の巨大な一枚物	○地蔵・子（一人だけ服）・石	—	—	○	
17		金蔵院本	金蔵院（新潟県糸魚市）	4		○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	○	○	○	
18	安政2年（1855）	最勝寺本	最勝寺所（愛知県知多郡阿久比町）、立山博物館寄託	1	知多郡寺本村の常光院僧侶・至圓制作	○地蔵・子・石・卒塔婆？	—	—	○	橋と地獄谷の坂のそれぞれに地蔵菩薩が１尊ずつ
19		坪井家Ａ本	個人（愛知県名古屋市）、立山博物館寄託	4	芦峅寺教蔵坊→龍淵→日光坊旧蔵か、画工の飛陽蘭江齋が修復・輔弼	○地蔵・子・石・謎の人物？	○	—	○	
20		坪井家Ｂ本	個人（愛知県名古屋市）	4	日光坊旧所蔵	○地蔵・子・石・鬼	—	○	○	
21		立山博物館Ｆ本（富山県立図書館本）	立山博物館	4	・富山市立図書館→S18 富山県立図書館→R2 立山博物館 ・裏書に遠州敷智郡引馬城之南米津村の磐谷写	○地蔵・子・石・卒塔婆？・鬼	○	○	○	
③芦峅寺宿坊家との関係は不明だが「布橋灌頂会」が描かれている立山										
22		立山黒部貫光株式会社本	立山黒部貫光株式会社（富山市）、立山博物館寄託	3		○地蔵・子・石	△※	—	○	地獄谷の方に地蔵菩薩坐像あり ※錫杖は持っているがが宝珠は確認できない

Ⅱ　岩峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅										
番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備　　考	地蔵菩薩の描かれた場面				
						賽の河原（構成要素）	二十五菩薩中	閻魔堂前	施餓鬼法要	その他
①岩峅寺の宿坊家に伝わっている立山曼荼羅										
23		玉林坊本	個人（富山市）	4		○地蔵・子・石	―	―	○	
24		中道坊本	個人（立山町）、立山博物館寄託	4	岩峅寺中道坊	○地蔵・子・石・鬼	―	―	○	
②岩峅寺の宿坊家の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅										
25		立山博物館Ａ本	立山博物館	2		―	―	―	―	地獄谷に身替り地蔵
③岩峅寺の山絵図の構図と関係する立山曼荼羅										
26	文化3年（1806）	中嶋家本（旧市神神社）	個人（滋賀県東近江市）、立山博物館寄託	1	北條左近平氏富写	―	―	―	―	地蔵堂あり
27	天保2年（1831）又は天保7年（1836）	志鷹家本	個人（立山町）、立山博物館寄託	1	小松谷御坊正林寺（京都市）旧蔵	△子・石のみ	―	―	―	地蔵堂あり
28	元治2年（1865）	立山博物館Ｅ本	立山博物館	1	摂津国嶋下郡坪井村の村田廣秀写	―	―	―	―	地獄谷に地蔵堂あり
29		立山博物館Ｃ本（旧広川家本）	立山博物館。個人（新潟県糸魚川市）旧蔵	1		―	―	―	―	地獄谷に地蔵堂あり
30		立山博物館Ｂ本	立山博物館	2		△みくりが池の湖岸に嬰児（裸）	―	―	―	
31		立山博物館Ｃ本	立山博物館	1		―	―	―	―	
32	1835年か	飯野家本	個人（高岡市）	1		―	―	―	―	地獄谷に地蔵堂のみ
④岩峅寺宿坊家との関係は不明だが、「岩峅寺」が詳細に描かれている立山曼荼羅										
33		専称寺本	立山博物館、専称寺（射水市）旧蔵。	3	地獄図・極楽図の２幅もあり	○地蔵・子・石・鬼	―	―	―	
34		竹内家本	個人（滋賀県湖南市）、立山博物館寄託	4		○地蔵・子・石・鬼	―	―	―	地獄谷に地蔵菩薩あり、地蔵堂も別にあり
35		桃原寺本	桃原寺（魚津市）	4	４幅のうち、３幅の軸裏に「桃原寺蔵 / 立山繪傳」、「桃原寺蔵 / 立山　来迎圖」「桃原寺蔵 / 立山　地獄圖」	○地蔵・子（服）石・地蔵堂	―	―	○	
36		西田家本	西田家（上市町）	4		○地蔵・子・石・鬼	―	―	○	

番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備　　考	地蔵菩薩の描かれた場面				
						賽の河原（構成要素）	二十五菩薩中	閻魔堂前	施餓鬼法要	その他
Ⅲ　立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅										
37		来迎寺本	来迎寺所（富山市）	4	・近年行ったデジタル近赤外線撮影による科学調査で、一枚の折り畳み形式であったことが判明。 ・光明山摂取院来迎寺（見附来迎寺）	○地蔵・子（服の子も）・石	－	－	○	
38		大徳寺本	慈興院大徳寺（魚津市）	4		○地蔵・子（2 種）・石・卒塔婆	－	－	○	
39		称念寺A本	称念寺（高岡市）	2		○地蔵のみ　池に炎	－	－	－	
40	文化十年（1813）	称念寺B本	称念寺（高岡市）	2		－	－	－	－	
41	天保14年（1843）	称名庵本	立山博物館、称名庵（富山市）旧蔵	1		－	－	－	－	地獄谷に地蔵堂あり
Ⅳ　特徴のある立山曼荼羅										
42		伊藤家本	個人（小矢部市）	2		○地蔵・子（裸）・石・鬼	－	－	○	
42		藤縄家本	個人（上市町）、立山博物館寄託	2		○地蔵・子	－	－	－	山中に 4 地蔵あり
44		村上家本	個人（富山市）	1		－	－	－	－	
45		福江家本	個人（小矢部市）	2		－	－	－	－	
46		大仙坊C本	大仙坊（立山町）	2	・大仙坊の檀那場が尾張国 ・それぞれの軸裏に「血ノ池地獄圖」、「賽乃河原地蔵尊」、それぞれの木箱蓋裏に「血乃池図登双幅」、「賽乃川原図登双幅」とあり。	○地蔵・子ども（服）・石・鬼	－	－	－	
47		日光坊A本	個人（富山市）、立山博物館寄託	1	芦峅寺日光坊は尾張国を檀那場とする	－	○	○	－	
48		大仙坊D本（布橋灌頂会来迎師院主之図）	大仙坊（立山町）	1	芦峅寺日光坊は尾張国を檀那場とする	－	－	－	－	
Ⅴ　明治期以降に制作された立山曼荼羅										
49		玉泉坊本	個人（立山町）、立山博物館寄託	1	芦峅寺玉泉坊	－	－	－	－	地獄谷が火炎谷
50		日光坊B本	個人（立山町）、立山博物館寄託	3	芦峅寺日光坊は尾張国を檀那場とする	－	－	－	－	
51		坂木家本	個人（立山町）、立山博物館寄託	4	福泉坊旧蔵であり、檀那場が尾張国	－	－	－	－	
52		四方神社本	四方神社（富山市）	2	屏風・二曲一双雙	－	－	－	－	

１－２　立山曼荼羅の地蔵菩薩が描かれた場面

１－１で見たように、「立山曼荼羅」諸本の多くに、地蔵菩薩は描かれている。ここでは「相真坊Ａ本」をもとに、地蔵菩薩が描かれる主な⑴～⑶の場面と地蔵信仰と関係の深い⑷の場面を紹介したい。

（１）賽の河原の地蔵菩薩

「立山曼荼羅」では、「賽の河原」は別山の下方、ちょうど玉殿窟と地獄を結ぶような位置に描かれることが多い。これは、立山山中の雷鳥沢と浄土沢の出会いに実在する賽の河原が意識されているからであろう。一般に賽の河原は、三途の川の河原もしくは死出の山路の裾野の河原にあり、幼くして亡くなり親を悲しませたり、孝行ができなかったりといった罪をおかした者が、この冥界に堕ちる場所である。亡者となった子どもたちはそこで娑婆の父母兄弟供養のためと石積みをして遊ぶが、日が暮れると地獄の鬼がやってきて、子どもたちがせっかく造った塔を崩してしまう。地蔵菩薩はそこに現れ、自分をこの世の親と思えと、子どもたちを鬼から守ってくれるのである。渡浩一氏は、「賽の河原」の図像は「河原・子どもの亡者・鬼・地蔵・石積み（石塔）の５つを基本構成要素」としている。

【写真 1】賽の河原の地蔵菩薩
（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分）

「相真坊Ａ本」【写真１】では、鬼は描かれておらず、地蔵菩薩の足元には蓮弁と紫雲が描かれており、亡者となった子どもたちのもとに飛来する姿となっている。「賽の河原」の場面は、立山曼荼羅52本のうち34本に描かれており、大切なモチーフだったことが分かる。

【写真 2】雄山と浄土山

（２）阿弥陀如来に従う二十五菩薩の一尊として来迎する地蔵菩薩

「立山曼荼羅」では、立山山中の地獄谷のあたりで、地獄に堕ちた亡者に対する責め苦の様子が強調して描かれるが、それに相対するかのように、その地獄谷からの対角線上に位置する立山連峰の雄山とその右手の浄土山【写真 2】、あるいは雄山とその左手の大汝山の山間に、阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎が描かれることが多い。そこには、阿弥陀如来が住む西方極楽浄土の様子自体は見られないものの、いわゆる阿弥陀聖衆来迎の図柄をもって立山浄土の場面としている。

来迎とは、念仏行者の臨終の際、阿弥陀如来が脇侍の観音菩薩や勢至菩薩とともに（これを阿弥陀三尊という）、または、その他の二十五菩薩とともに飛雲に乗り、楽器を演奏しながら死者を迎えにやってきて、極楽浄土へ連れて行くことである。「立山曼荼羅」諸本の来迎場面を見ていくと、阿弥陀如来や諸菩薩の来迎の描かれ方は３種類に大別され、①阿弥陀三尊のみ、②阿弥陀如来と二十五菩薩のみ、③一画面に①と②を個別に描くもの、などが見られる。②、③の来迎場面には、阿弥陀三尊の後ろの方に地蔵菩薩が含まれている【写真３】ことがあり、「立山曼荼羅」52本のうち、15本（錫杖か如意宝珠を持たないが地蔵菩薩と思われる２本を含む）に描かれている。

【写真 3】二十五菩薩中の地蔵菩薩
（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分）

画中での来迎場面の配置状況については、「吉祥坊本」などでは阿弥陀如来と二十五菩薩が浄土山の背後から山間を縫って飛来する形で描かれている。これは他の「立山曼荼羅」にも多く見られる一般的な描き

方である。一方、「大仙坊Ａ本」などでは、雄山や大汝山の背後から阿弥陀三尊が、あるいは阿弥陀如来と二十五菩薩が、山間を縫って飛来する形で描かれている。

いずれの「立山曼荼羅」を見ても、阿弥陀如来と聖衆の来迎場面は、概ね雄山と浄土山の山間に描かれている。なぜかというと、立山の自然現象と関係があり、立山の雄山山頂では、朝日が昇るとき、東が晴れていて、西に霧がかかっていると、霧中に自分の影とそれを取り巻く美しい輪が見えることがある。いわゆるブロッケン現象【写真４】であり、夏場は雄山と浄土山の山間あたりにこの不思議な自然現象がときどき見られる。おそらく、これがいつの頃からか極楽浄土からの阿弥陀如来の来迎に見立てられ、信仰されるようになったと考えられる。

【写真４】ブロッケン現象

（３）閻魔堂前の地蔵菩薩坐像

「立山曼荼羅」諸本の中には、芦峅寺の閻魔堂前にかつて安置されていた地蔵菩薩坐像を描いたもの【写真５】があり、女性救済儀式である布橋灌頂会に参列する人々を見守るように鎮座している。

【写真５】閻魔堂前の地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分）

現在、芦峅寺閻魔堂【写真６】にはこのような坐像は安置されていないが、観音寺（小矢部市）の銅造地蔵菩薩半跏坐像（以下、地蔵菩薩坐像）は、江戸時代まで芦峅寺閻魔堂に安置されていたとされる。この地蔵菩薩坐像は、明治初年の神仏判然令にもとづく廃仏毀釈の影響で、まず小矢部市倶利伽羅の長楽寺へ移遷され、さらに明治５年（1872）に現在の観音寺に移遷された【写真７】。その際にこの像容を絵画にとどめ、招来するのに尽力した人々の名前がその周囲にびっしりと書き込まれた御影【写真８】が伝わっている。

【写真６】芦峅寺閻魔堂

台座から光背までの総高が約２メートルの金銅仏像であり、像容は左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、左足は踏み下げにしている。この像は、背面やその蓮華座蓮弁【写真９】などに多くの刻銘があり、その一部に、

信州松本町　立山講中
願主　教蔵坊照界　立之
請負　松本飯田町　薬鑵屋佐原市右衛門尉正孝
皆時　文政八年乙酉七月吉祥日
御鋳物師大工職　信濃國上田住　小嶋大治郎　藤原弘孝
謹制

とあり、これによると、芦峅寺教蔵坊の衆徒照界が願主となり、文政８年（1825）７月に信州松本町の立山講から寄進されたものであることがわかる。寄進者の所在地は、現在の糸魚川市から、長野県大町市や松本市、安曇野市などにまたがる約142村で、俗名1221人、戒名で1458人の合わせて2679人もの寄進者の名前が刻み込まれている。その分布は千国街道に沿っており、概ね教蔵坊の檀家の分布状況と合致している。銘文中の「立山講」は、立山信仰の結社ではなく、木綿

【写真７】銅造地蔵菩薩半跏坐像

【写真８】立山請来地蔵尊御影

業者の経済団体である。松本は当時、足袋の産地で、越中の新川木綿をたくさん買い入れ、それを足袋に加工して、江戸などへ出荷していた。薬鑵屋佐原市右衛門尉正孝など松本の大商人たちが世話人となり、寄進を集めたと思われる。寄進の目的は、先祖・家族の供養、特に女性の戒名が多いことから女性が堕ちるとされた血の池地獄からの救済、さらには延命長寿なども考えられる。

この地蔵菩薩坐像は、「立山曼荼羅」52本のうち、10本に描かれている。建立予定のものを「立山曼荼羅」に描き込む可能性もないではないが、基本的には文政８年（1825）以降に制作されたものと推測できる。

この地蔵菩薩坐像を描いた「坪井家Ｂ本」【写真10】は、布橋灌頂会の様子など、他の立山信仰の内容が比較的正確に描かれているのに対し、地蔵菩薩坐像は巨大で、閻魔堂の大きさをはるかに越えている。尾張国を檀那場とする日光坊の旧所蔵とされ、檀那場の人々に布橋灌頂会への参加を促すために、地蔵菩薩の功徳の大きさを視覚的にも強調したと考えられる。

【写真９】銅造地蔵菩薩半跏坐像の蓮華座蓮弁

【写真10】巨大な地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 坪井家Ｂ本」部分）

（４）施餓鬼法要の場面

施餓鬼法要【写真11】は、餓鬼道で苦しむ衆生に食事を施して供養することで、またそのような法会を指す。日本では先祖への追善として、盂蘭盆会に行われることが多い。お盆には祖霊以外にもいわゆる無縁仏や供養されない精霊も訪れるため、戸外に精霊棚（施餓鬼棚）を儲けてそれらに施す習俗があり、これも御霊信仰に通じるものがある。地獄道、人道のみならず、餓鬼道も含む六道能化の地蔵菩薩の功徳を表すとされ、施餓鬼法要と地蔵菩薩との関係は深いようである。

【写真12】は立山信仰とのつながりを示す鷹の違い羽の紋が見える眼目山立山寺（中新川郡上市町）所蔵の施餓鬼棚（現在は施食棚という呼称）だが、やはり地蔵菩薩が棚上に祀られている。

「立山曼荼羅」では、「施餓鬼法要」と「賽の河原」の場面が隣接して描かれることが多い。

なお、「立山曼荼羅」では、釈迦十大弟子の目蓮が立山地獄の阿鼻地獄や血の池地獄に堕ちた母を救うという「目蓮救母説話」に関する一連の場面、具体的には、「目連の母が串刺しにされ炎で焼かれる」、「施餓鬼法要」、「血の池地獄」、そして「火の車」が描かれている。これらも隣接して描かれることが多い。

【写真13】は、芦峅寺善道坊に伝来したもので、毎年７月15日に芦峅寺で行われる大水陸会（大水施餓鬼法要会）への勧化を目的とするものとされる。ここでも、左側に「施餓鬼法要」、右側に「血の池地獄」や「賽の河原」など、いくつかの立山地獄の場面を配している。また、「施餓鬼法要」が「血の池地獄」付近に描かれている場合、如意輪観世音菩薩が描かれている場合がある。

【写真11】施餓鬼法要（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分）

「相真坊Ａ本」は上記⑴～⑷がすべて描かれている。特色としては⑵の

【写真12】立山寺の施食棚

「二十五菩薩中」【写真14】において、阿弥陀如来、他の菩薩たちが茶色で着色されているのに対して、地蔵菩薩が控えめな佇まいの中にも、その法衣のみが赤色で着色され人目を引くようにされているのは、着目すべき点かと思われる。

【写真13】「立山地獄」刷り物

以上、「立山曼荼羅」で地蔵菩薩が描かれている場面を紹介してきた。

福江充氏によると、「「立山曼荼羅」は、立山連峰上空の天道や立山地獄谷の地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・立山山麓の人道など、いわゆる六道の表現（六道絵）と、阿弥陀如来の表現といった２つのモチーフが描かれていることから、立山曼荼羅は「六道絵＋阿弥陀聖衆来迎図」としても位置付けられる」と述べる。

【写真14】二十五菩薩中の地蔵菩薩（前掲【写真３】部分拡大）

地蔵菩薩は本来、六道能化の菩薩であるから、苦しみの大きい三悪道を中心に、錫杖をついて六道を自由自在に巡り、迷い苦しむ人々のそばに駆けつけ救うと信じられ、「立山曼荼羅」においても、六道の一部である地獄道と人道の境界上にある「賽の河原」で幼くして亡くなった子どもたちを、人道の山麓・芦峅寺の閻魔堂前で地獄からの救済を求める人々を見守っている。また、阿弥陀如来聖衆来迎図のように、極楽浄土の方から聖衆の一尊として、最も苦しみの大きい地獄道に堕ちた亡者のもとに飛来する。「立山曼荼羅」には、阿弥陀如来や如意輪観世音、不動明王も多く描かれるが、他の諸尊よりも地蔵菩薩は救済の舞台が広く、苦しみの只中にいる人々のそばに絶えず寄り添い、ときに身を捨ててまで、縁ある衆生を救うと言えるのではないか。

１―３　『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類にみる立山曼荼羅と地蔵菩薩

１－３－１　地蔵菩薩が描かれる場面本数

下の【表 2】は、１－１の【表 1】をもとに、分類ごとに地蔵菩薩が描かれる「立山曼荼羅」の本数を整理したものである。

表２　『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類にみる地蔵菩薩が描かれる場面とその本数

分類項目	地蔵菩薩が描かれた場面			
	賽の河原	二十五菩薩中	閻魔堂前	施餓鬼法要
Ⅰ　芦峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅＜22本＞	22本/22本	14本※1 /22本	9本/22本	21本/22本
Ⅱ　岩峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅＜14本＞	6本※2 /14本	0本/14本	0本/14本	4本/14本
Ⅲ　立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅＜５本＞	3本/5本	0本/5本	0本/5本	2本/5本
Ⅳ　特徴のある立山曼荼羅＜７本＞	3本/7本	1本/7本	1本/7本	1本/7本
Ⅴ　明治期以降に制作された立山曼荼羅＜４本＞	0本/4本	0本/4本	0本/4本	0本/4本

※１　うち２本は、錫杖か宝珠のどちらかが判然としない地蔵菩薩が描かれている。
※２　他に２本、地蔵菩薩は描かれていないが、子と石のみが描かれるものがある。

１－３－２　芦峅寺と岩峅寺の「立山曼荼羅」にみる地蔵菩薩

加賀藩は、芦峅寺・岩峅寺の衆徒に対し、立山に関するいくつかの宗教的権利を分与し、経済面で互いに競わせ、両者が協力して一大勢力とならないようにして力を削いだ。山の管理権を立山から遠い岩峅寺に、加賀領国内外での廻壇配札活動を行う権利を立山に近い芦峅寺に与えた。立山曼荼羅の展開には、加賀藩の立山衆徒に対する支配のあり方が、大きな影響を与えたと考えられる。以下に、両峅寺の立山曼荼羅の特徴を地蔵菩薩の図像から紹介する。

（１）［芦峅寺関係の立山曼荼羅］（22本/52本中）にみる地蔵菩薩

芦峅寺衆徒は立山に直接関わる権利を失い、加賀藩領国内外での廻壇配札活動を経済的な基盤とせざるをえなかった。領国外の檀那場の人々は、当然領国内の人々より、立山や立山信仰に対する知識が乏しく、そうした人々にも効果的に立山信仰を布教するために、芦峅寺では人目を引く説話画風の立山曼荼羅が作成されたものと思われる。とりわけ、女人禁制で登拝を許されぬ女性には、血の池、不産女・賽の河原などの地獄の場面を「立山曼荼羅」の図像を示しながら説き、芦峅寺における施餓鬼法要への代参と、布橋灌頂会への参加を勧めたものと思われる。

この［芦峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅］（以下、［芦峅寺関係の立山曼荼羅］）の最大の特徴は、芦峅寺で行われていた女人救済儀式である布橋灌頂会の様子が大きく描かれている点である。布橋灌頂会のように芦峅寺で行われたとされる施餓鬼法要もほぼすべて（21本）に描かれている。布橋灌頂会に関連して描かれる「閻魔堂前」（９本／22本）の地蔵菩薩坐像と、「二十五菩薩中」（14本／22本）の地蔵菩薩も、他の分類では［特徴ある立山曼荼羅］に属する「日光坊Ａ本」１本に描かれるのみである。加えて、［芦峅寺関係の立山曼荼羅］は立山山中の地獄の場面や山中にて語られる説話や伝説などを大きく丁寧に描くという特徴があり、「賽の河原」はすべて（22本／22本）に描かれている。江戸後期において地蔵信仰といえば賽の河原信仰というぐらい、賽の河原の幼くして亡くなった子どもたち、そしてその子どもたちを救うとされる地蔵菩薩に寄せる庶民の思いがいかに大きかったかを示すのではなかろうか。

また、一般的な地蔵菩薩の描かれ方と異なり、異彩を放つものとして「最勝寺本」がある。地蔵菩薩が布橋のたもとと地獄谷の坂の上に描かれるなど、通常とは異なる位置に描かれている。立山地獄の位置関係も実際とは大きく異なり、布橋灌頂会は他の地獄絵の画像が転用されている。他にも、剱岳の針山地獄が描かれ、浄土山には風神・雷神が描かれている。「最勝寺本」は、安政２年（1855）、知多郡寺本村の常光院の僧至円が描いたもので、完成後に現所蔵の最勝寺に奉納したとされ、僧至円がどのような地獄絵を参考とし、制作したのか興味深い。

このように、［芦峅寺関係の立山曼荼羅］には、岩峅寺集落を簡素に描く、または描かないことにより、一本に上記①～④の複数場面が描かれることが多い。

（２）「岩峅寺関係の立山曼荼羅」（14本/52本）にみる地蔵菩薩

岩峅寺の衆徒は、夏の期間中、室堂に泊まり込んで、主峰雄山山頂の峰本社に奉仕し、登拝の男たちの世話をした。冬が訪れると下山し、主に越中国、隣国の加賀・越後・能登の国々に出開帳をして廻り、「立山曼荼羅」の絵解きをしたといわれる。この場合、主に加賀藩領国内であり、どちらかといえば地元の人々が立山に訪れることに対応して、山絵図風の「立山曼荼羅」が作成されたものと考えられる。

この［岩峅寺集落の宿坊家に関係する立山曼荼羅］（以下、［岩峅寺関係の立山曼荼羅］）の特徴は次の(i)、

(ii)の通りである。(i)岩峅寺の境内を丁寧に描くのに対して、芦峅寺で行われていた布橋灌頂会は描かない。(ii)立山地獄や立山山中の説話・伝説なども大きく描くものは少なく、岩峅寺衆徒が版権を持った「立山登山案内図」の構図を模写したようなものが多い。上記のように、山絵図としての色彩が強い［岩峅寺関係の立山曼荼羅］には、［芦峅寺関係立山曼荼羅］によく見られる、「二十五菩薩中」や「閻魔堂前」の地蔵菩薩が描かれたものはない。基本的には山岳景観を描いた山絵図風の［岩峅寺関係の立山曼荼羅］においても、「賽の河原」は14本中８本に描かれており、岩峅寺衆徒の絵解きでも、聴く者の心をつかむ、外せない話材だったようである。後述する岩峅寺延命院に伝わる「立山手引草」にも「賽の河原」の地蔵菩薩が登場する。

ちなみに、描かれている８本のうち、「志鷹家本」では子どもたちと石のみ、「立山博物館Ｂ本」【写真16】にはみくりが池の岸辺に裸の子どもたちのみが描かれ、地蔵菩薩は描かれていない。両本とも山絵図風の中に、山中に語り継がれる説話や伝説を織り交ぜたものである。このような作風に近いものとして「立山博物館Ａ本」があり、これには地獄谷辺りに「身替り地蔵」として炎に包まれる地蔵菩薩が描かれている。これは『今昔物語集』などに見られる、女性の亡者の身代わりとなって地獄の業火に焼かれた地蔵菩薩を想起させる。また、「施餓鬼法要」も、山絵図風で法会が描かれることの少ない［岩峅寺関係の立山曼荼羅］でも、14本中の４本に描かれており、立山山中の管理権を与えられ、山中での施餓鬼法要への代参を勧めた岩峅寺衆徒において、大切な法会だったことがうかがわれる。

【写真16】みくりが池岸辺の子どもたち
（「立山曼荼羅 立山博物館Ｂ本」部分）

総じて、［岩峅寺関係の曼荼羅］は、絵解きで語られるような、説話、信仰上の観念としての地蔵菩薩は描かれることは少ないものの、地獄谷や伽羅陀山の地蔵堂や地蔵の石像といった具体物や、「さいのかわら」、「じごく谷」、「ぢぞう堂」、「からだセン」（「立山博物館Ｇ本」）といった地名が明記されていることがあり、地蔵霊場としての立山の原風景をとどめ、立山山中の名所や要所を紹介していたといえる。

１－３－３［立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅］（５本/52本）にみる地蔵菩薩

立山ゆかりの寺院のうち、芦峅寺と岩峅寺以外に立山開山者である佐伯有頼や父親の佐伯有若を開基とする寺院に伝来する「立山曼荼羅」がある。布橋灌頂会が描かれている「来迎寺本」、「大徳寺本」には、布橋灌頂会と関連性のある「施餓鬼法要」と、「賽の河原」が描かれている。

称名庵は、称名滝の巌上から招来した如意輪観世音菩薩を奉じて開基したとされる（現在は廃寺）。その「称名庵本」には、地蔵菩薩は描かれていないが、如意輪観世音菩薩が２か所に描かれている。

また、「称念寺Ａ本」【写真17】は、布橋灌頂会の場面がなく、岩峅寺集落が大きく描かれた山絵図風であるが、立山開山縁起や立山地獄、阿弥陀三尊像の来迎などが描かれている他、みくりが池と思われる池が燃えており、その近くには光背から光を放つ地蔵菩薩が描かれている。以前は場面の名称を書いた短冊が貼られていたらしく、絵解きに使用されていたことが推察される。

【写真17】池が燃えている様子
（「立山曼荼羅 称念寺Ａ本」部分）

１－３－４［特徴のある立山曼荼羅］（５本/52本）にみる地蔵菩薩

「大仙坊Ｃ本」【写真18】は、芦峅寺大仙坊に伝来する作品であり、「血の池地獄」と「賽の河原」だけを１幅ずつに描いている。それぞれの軸裏に「血ノ池地獄図」、「賽ノ河原地蔵尊」と墨書され、さらにそれぞれの木箱蓋裏にも「血乃池図登双幅」、「賽乃川原図登双幅」とある。

また、「日光坊Ａ本」【写真19】は、布橋灌頂会の場面だけを描いたものである。加賀藩からの制札とともに、先述した地蔵菩薩坐像が丁寧に描かれている。画面上段の「二十五菩薩中」にも、地蔵菩薩が描かれており、この二尊の地蔵菩薩が布橋灌頂会に参列する人々を見守っている。

上記の２本は、「立山曼荼羅」に描かれる図像の中から「賽の河原」、「布橋灌頂会」を強調して描いたと考えられる。大仙坊、日光坊ともに、尾張国を檀那場としており、江戸後期には尾張国が含まれる東海地方での檀那場形成、及び廻壇配札活動は非常に盛んであったという。檀那場を形成し、廻壇配札活動をすすめる際に、当然、その地域の人々の心をつかむモチーフが求められ、「大仙坊Ｃ本」のように、「賽の河原」の場面に特化したものが制作されたと考えられる。また、尾張国、そのお隣の三河国はそれぞれ知多木綿・三河木綿で知られる日本的な名産地であり、「日光坊Ａ本」のように、「布橋灌頂会」に特化した立山曼荼羅を制作し、布橋灌頂会で使用する木綿の調達を有利にすすめようとしたのであろう。

【写真18】「立山曼荼羅 大仙坊Ｃ本」部分

【写真19】「立山曼荼羅 日光坊Ａ本」部分

１－３－５［明治期以降に制作された立山曼荼羅］（4本/52本）にみる地蔵菩薩

明治期の神仏判然令による影響で、江戸時代に立山信仰の拠点であった立山衆徒らは神職に転じ、立山山中の仏像や宿坊の仏教的な文物を数多く手放した（芦峅寺閻魔堂前の地蔵菩薩坐像が、観音寺に移遷されたことは先述した）という。そのため、「立山曼荼羅」の中にも仏教色を排除して神道色を強調していることから、４本とも地蔵菩薩は描かれてはいない。

同様に、明治期以降の名称が記されており、「玉泉坊本」には伽羅陀山が「炎高山」とされ、その山の祭神の名が「火結神」と記されている。「炎高山」は「えんこうさん」と読め、上述した『今昔物語集』巻十七の女性の亡者が遺族に追善供養を頼んだ僧の名前が延好であり、興味深い。

２　「立山曼荼羅」に描かれた立山山中の実景と説話－立山曼荼羅の原風景－

「立山曼荼羅」の立山地獄とされた領域の実景と、その実景から生まれた説話や絵画などとともに、「立山曼荼羅」を紹介したい。

２－１　賽の河原の地蔵菩薩

２－１－１　賽の河原の実景と地蔵石仏

立山山中の雷鳥沢と浄土沢の出合い、血の池の東北方500mほどの浄土川（祓堂川ともいう）の河原を、「賽の河原」と呼ぶ【写真20】。

この河原には保存堂【写真21】があり、六地蔵が祀られている【写真22】。江戸期の『古代度々争論記』、「岩峅寺文書」所収の貞享３年

【写真20】賽の河原

（1686）の『立山寄附券記』、『和漢三才図会』にも、賽の河原の地蔵堂が記されている。全国に数ある山中地獄には石仏や石塔などの石造物が並ぶところが多く、わけても賽の河原といわれるところには、尖帽子状の積石が点在する。

立山の賽の河原の場合は、昭和35～37年の富山県教育委員会による「立山歴史文化遺跡調査」時には、「浄土川のふちに六体の石地蔵があり、その近くに十指で数えられるほどの積み石が見られる程度であった」と記され、その後、この六体の石地蔵にコンクリート小堂が設えられた。しかし、浄土川の出水で倒壊し、今日の小堂は２代目であるという。昭和40年発行の佐伯立光著『立山史談』には、「数知れない程、小石を以て塔を積み地蔵菩薩の石仏も点々として建立され……明治維新までは数百体も存知されていた」という。かつて浄土川に沿った室堂からの道があったらしく、また大走り・小走りといって、別山・真砂岳からの道もここに至っていたが、登山コースの変化によって次第に忘れられたようである。さらに浄土川の氾濫や周辺の山地からの雪崩で変容が著しく、昔日の面影はない。

『立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）「地獄谷・賽の河原」』の「立山地獄谷・血の池地獄・賽の河原周辺石造物一覧」によると、賽の河原には６体の地蔵石仏が所在するとある。

【写真21】賽の河原の保存堂

【写真22】
賽の河原の地蔵石仏

２－１－２　民俗学的視点からみる賽の河原

全国の死者の霊が籠ると信じられてきた霊山・霊場や、村境・峠・河原・湖畔・海岸などの境界的場所には、賽の河原と呼ばれる場所が少なくない。立山の地獄谷の他にも、有名なところでは、下北の恐山、津軽の川倉、下野の岩船山などが知られるが、地元の人たちだけに知られているような賽の河原は全国至る所に存在すると思われる。この賽の河原は一般的には地獄の一所と考えられがちだが、三途の川を渡る手前であることから地獄の外側であり、いわば「この世」と「あの世」の境界的な場所であるとされる。こういった境界的領域の石ころだらけの場所が賽の河原に擬せられ、地蔵の石像が祀られていることが多い。

賽の河原および地蔵菩薩は、境界にあってソトからくる悪霊などから、村などのウチを守る神である賽の神信仰との関連が指摘されている。たとえば、芦峅寺の布橋を渡る衆徒墓地が広がるように、墓地は「あの世」への入り口と考えられていた。実際、河原はしばしば墓地とされ、文献考証学的に賽の河原の語源とされてきた、賀茂川と桂川の合流する佐比の里は、古来、京の都の主要な葬地の一つであった。

また、地蔵菩薩は子どもとの関係が深く、『今昔物語集』巻十七にみられる地蔵説話では、地蔵菩薩は「端厳ナル小僧」の姿で地獄にも現世にも現れる。地蔵菩薩が子どもの姿で現れるのは、女性や老人と並んで子どもを霊託の媒介者とするシャーマニズム的観念が日本古来から根強く、現世と他界を媒介する両義的存在としての機能を持つ子どもと、縁ある衆生を救うために現世と地獄を往来する地蔵菩薩とが習合した姿と考えられる。

「立山曼荼羅」では、「賽の河原」が玉殿窟と地獄道との間に描かれている。これは「賽の河原」がこの世とあの世の「境」、地獄道や餓鬼道、畜生道といった悪道への入り口として、位置付けられていることを示している。民俗学的な意味における賽の河原と、立山山中の実景で地獄と浄土の境界に位置する賽の河原、さらには、「立山曼荼羅」の「賽の河原」に描かれる地蔵菩薩と子どもたち、すべてが絶妙に融合し、賽の河原はあるべきところに描かれていると言えよう。

２－１－３　立山曼荼羅の河原に描かれる地蔵菩薩

岩峅寺延命院に伝わる「立山曼荼羅」の絵解きの種本（もしくは台本）とされる『立山手引草』では、

釈迦如来は、沙羅双樹の煙りとともに隠れさせ給ふ。弥勒菩薩は、未だこの世に出で給はず。然れば、今の我々は、釈迦の御説法に後れて生まれ、さらに、弥勒御出世よりも先に生まれたれば、誠に父に討たれ、母に放たれた孤児の如くなり。

とあり、釈迦入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏世界の人道に生きる我々も、悟りへと導く釈迦如来も弥勒菩薩もいないのだから、父母のいない孤児と一緒であるとしている。

その上で、無仏世界の救い主である地蔵菩薩の功徳を述べていき、「賽の河原」では、

幼くして、二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ子供らが、堕ち行くところなり。石を一つ積んでは父のため、母のためにと供養をなすが、夕べになれば鬼来たりて、その塔を悉く打ち崩すなり。それ、罪の中にて最も重き「親不孝の罪」なりと。従つて、父母に代はりて、地蔵子供たちを守るなり。

と語りかけてゆくが、「立山曼荼羅」では、このように、鬼が子どもたちに執拗な暴力をしたり、石積みを破壊したりする行為を生々しく描いたものは少ない。「立山曼荼羅」諸本での「賽の河原」は、管見の限りでは、地蔵、子、石、卒塔婆、鬼の５要素で構成されるように見え、そのうち鬼が登場するものは、34本中、15本にすぎない。しかも、鬼が描かれる場合でも、子どもたちを呵責する恐ろしい鬼はあまり描かれず、描かれてもあまり恐ろしくないか、少し離れたところで子どもたちを見守るような鬼が描かれるものの方が多い。「賽の河原」の不可欠の要素は、地蔵・子ども・石積みであり、鬼は二次的な存在と言えそうである。

しかし、「立山曼荼羅」諸本の中で１本だけ、［芦峅寺関係の立山曼荼羅］に分類される「筒井家本」【写真23】では、鬼が金棒で子どもの頭をたたき、子どもの頭からは血が流れ、鬼の金棒から血が滴り落ちるという、恐ろしい「賽の河原」が描かれている。

【写真23】「立山曼荼羅 筒井家本」部分

渡氏によると、「『西院河原地蔵和讃』をもとに創作された絵画に、鬼の呵責が明確に描かれたものがわずかながら存在する」という。

また、同氏は「この『西院河原地蔵和讃』の原型は近世初期に成立し、唱導・歌謡・芸能などの世界で唄われ広まっていったものと思われる。江戸も後期になると、賽の河原の思想はほとんど地蔵信仰の中心となっているかのような盛観を呈し、地蔵信仰といえば幼児の守護を祈願するもの、あるいは胎児の安産を祈るもののように考えられ、安産地蔵・子安地蔵・腹帯地蔵等、子どもと縁の深い地蔵信仰となっていく。このように、中世から近世にかけて、とりわけ賽の河原思想が庶民に広まっていった背景には、中世の末頃、イエ制度の民衆レベルでの成立を背景とした、子どもをイエの大切な後継者とみる子宝観念が一般的になり、親より先立ってしまってイエを継げないという未報恩の罪をおかした罪人としての子どもの亡者が堕ちるところとして賽の河原信仰がうまれた」としている。

この「西院河原地蔵和讃」と同様のもので、立山の賽の河原の情景を歌った『立山西院川原地蔵和讃』が伝わっている。

帰命頂礼立山の西院の川原の物語り。きくにつけても哀れなり。二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ嬰児が、さいの川原に集まりて、父恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は此の世の声と事変わり、悲しさ骨身に通すなり

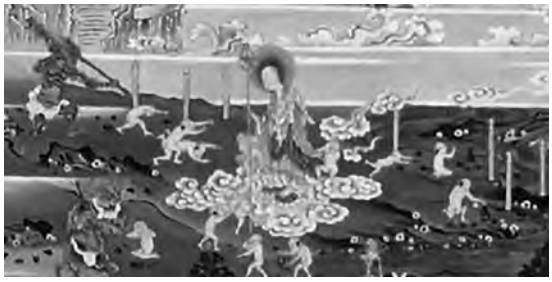
これは先述した『立山手引草』とも重なり、おそらく、立山衆徒が各地の檀那場で、この和讃を唱導したものと思われる。

たとえば、福江氏は、「芦峅寺の宝泉坊衆徒である泰音が、江戸の檀那場での勧進布教活動について記録した『廻檀日記帳』には、「立山曼荼羅」の絵解きの話材として、「地蔵尊（之御）咄し」という記述がある」と述べる。「宝泉坊本」には、地蔵菩薩に関する先述した４場面のすべてが描かれており、絵解きをしなが

らときに『立山西院川原地蔵和讃』も唱えられたと考えられる。賽の河原信仰および地蔵信仰を人びとに広めるのに有効だったのは、おそらく芦峅寺衆徒が行ったような民衆唱導であろう。

また、前述の渡氏は、「鬼の呵責がなく、地蔵の加護と石積みのみが表現されれば、当然のこととして、賽の河原は地獄のイメージから遠くなる。そしてさらに、楽しげに遊ぶ子どもの図像が付加されれば、それは楽園的イメージの世界にすら近くなる」と述べ、京都市・東福寺退耕庵蔵の「洛陽四十八箇所地蔵巡礼図」の一部で幕末に描かれた「第二十九江岸院際河原地蔵」の図像などは、まさにその楽園的イメージの賽の河原の図像と指摘する。

「立山曼荼羅」に目を転じると、幕末の慶応２年（1866）に、先ほどの宝泉坊の泰音が所蔵していた「宝泉坊本」をもとに、三河国岡崎藩主本多忠民が制作し、吉祥坊に寄進したとされるのが、「吉祥坊本」【写真24】である。この「吉祥坊本」は、表の上部に和宮の寄附を示す「静寛院宮御寄附」の識札があり、幕府の老中として家茂や和宮と関係があった本多忠民が、未亡人となった和宮に対し、家茂に対する追善供養として作品への寄進話をもちかけたのではないかと思われる伝本だが、「宝泉坊本」同様、地蔵菩薩に関する４場面のすべてが描かれている。「賽の河原」では、金棒を持って子どもたち３人を追いかける鬼と、泣きながら座り込む子どものそばで金棒をおさめる鬼が描かれている。鬼の姿や表情からは、先ほどの「筒井家本」のような生々しい鬼の呵責、子どもたちの悲痛は感じられず、どこか楽園のような、ほのぼのとしたものを感じさせる。昔は少なくなかった、わが子に先立たれた親の、亡き子の冥福を祈る気持ちの反映であり、檀那場の人々、とくに女性の心に寄り添うような絵画表現のように思える。



【写真24】「立山曼荼羅 吉祥坊本」部分

２－２　地獄谷・伽羅陀山の地蔵菩薩

２―２－１　地獄谷及び伽羅陀山の実景と地蔵石仏

立山地獄とは、中心をなす地獄谷と、先述した賽の河原、血の池地獄といわれた血の池、八寒地獄に比定されたみくりが池を界域とした。

地獄谷は現在、火山活動による亜硫酸ガス噴出を受け立ち入り禁止となっているが、昭和45年（1970）発行の富山県教育委員会編『立山文化遺跡調査報告書』には、「大正の初頃までは、この地獄谷の噴煙箇所には、必ず十数体のこれら大小の石仏石塔が集まり、広いこの地獄谷地域には一千本近くにも及ぶ石仏石塔が残存していたという」と見える。【写真25】

【写真25】地獄谷石造物群

この地獄谷で最も高い山が標高2,398mの伽羅陀山【写真26】である。山名の伽羅陀山は、地蔵菩薩の浄土の意味であり、立山地獄に堕ちた亡者救済の中心とされていた。一名に炎高山、また延好山とも呼ばれるが、後述する『今昔物語集』の立山地獄の説話に登場する人物に由来するものだろう。

【写真26】東から伽羅陀山を見る

山頂には保存堂【写真27】があり、地蔵の石像などが安置されている。現在の保存堂はコンクリートブロックで三方の壁とし、前面に鉄筋格子を入れ、土間と屋根をコンクリート造として建てられ、周りに石を積み上げ、龕としている。保存堂は幾度

かの倒壊や部材の散逸によって組み直され、現在の保存堂も先代のものとほぼ同位置、同方向に建てられていたようである。北東側の奥大日岳を背に、地獄谷方向に開口し、先代の保存堂を調査した、昭和36年（1961）の立山町史蹟調査会編『立山文化遺跡調査』第一編では「堂の建方からみて奥大日岳の遥拝所とされた感がある」としている。この地の地蔵堂は、『立山寄附券記』には、貞享３年に「加羅多山堂」とその建立願主名が見え、地蔵堂下から出土したという遺物や地蔵の石像の保存状態の良さからも、貞享以前から小堂が建てられていたと考えられる。

【写真27】伽羅陀山保存堂

そのかつての木造小堂の中央に安置されていたのが、【写真28】の石造地蔵菩薩立像である。南北朝時代の作と推定されている。緑泥片岩を用材とする総高46㎝、最大幅19.2㎝、最大奥行9.6㎝の浮彫像である。鈍い尖頂をもつ舟形光背をバックに、幅広い（光背幅）二重蓮花座上に立つ厚肉の地蔵菩薩立像である。光背の上部を薄肉彫の頭光とする。像容は、法衣の上に袈裟を着し、左手を胸前において宝珠を、右手は腹前において錫杖を、それぞれ持す。像容をつとめて肉厚く、その分光背を薄くし、かつ背面から削り取って軽量化している。立山山上への運搬を意識した製作なのであろう。

前掲した『立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）「地獄谷・賽の河原」』によると、地獄谷では３体の地蔵の石像と笠塔婆塔身として６体、伽羅陀山では８体の地蔵の石像が所在する。笠塔婆塔身とは、角柱あるいは板状の仏塔である塔婆に、笠の屋根をのせたものであり、塔身には仏像のほか、種子や名号などが記され、側面に造立の願主、年号、縁起などが記録される。

【写真28】伽羅陀山地蔵菩薩

２－２－２　「立山曼荼羅」の地獄谷・伽羅陀山に描かれた地蔵菩薩

山岳景観を描いた山絵図風の［岩峅寺関係の立山曼荼羅］にも、地獄谷と思われるところに地蔵菩薩が描かれているものがある。

立山博物館Ａ本【写真29】は、岩峅寺中道坊との関りを有するものである。山絵図そのもののといった様相を帯びており、画中の登場人物や諸仏・諸堂舎・名所・峰々などに、金地に墨書で名称が付されている。地獄谷のあたりには、黒く焼けこげた地蔵らしきものが描かれ、「身替り地蔵」と書かれている。

【写真29】地獄谷の身替り地蔵（「立山曼荼羅立山博物館Ａ本」部分）

『今昔物語集』の巻第十七「堕越中立山地獄蒙地蔵助語第二十七」は、修行僧延好が立山地獄に堕ちた女性の幽霊の依頼を受け、遺族に追善供養を営ませる話がでてくる。これは女性が生前、地蔵講に一、二度参詣したというわずかなばかりの縁で、地蔵菩薩が毎日地獄にやって来て、一日三回、自分の身代わりとなって地獄の責め苦を受けてくれ、身代わりとなって地獄の業火に焼かれたという内容である。この慈悲深い地蔵菩薩の姿を具象的に描いたのが米国・フリア美術館所蔵の『地蔵菩薩霊験記絵巻』である。

また、前述した『立山手引草』にも、地獄谷の地蔵菩薩の功徳が説かれており、

> 今、この地獄に立ち給ふ地蔵菩薩、毎日諸々の定に入罪人の代はりに地獄に入り給ふ故に、その御尊体は申すに及ばず、青蓮の玉顔まで焼けさせ給ふて立ち給ふ。地獄廻りの人々、この地蔵菩薩の慈悲深重にして、御肌を焦がし、賽銭までも焼けてあるを見ては、涙を流すこと、瀧の如くなれば、地獄の炎も消え、叫喚の声もしばらくは鎮まれば、大悲の

御恩を仰ぐなり。それ、世の中の有様を我が身に受け思ふに、五十年送りしこと、暁の夢見る間より早く来たれり。

「立山博物館Ａ本」の「身替り地蔵」の図像とイメージがよく重なるところであり、平安末期の『今昔物語集』の本説話が語り伝えられ、岩峅寺衆徒にも影響を与えたものと考えられる。

しかしながら、この身代わりとなって地獄の業火に燃やされる地蔵菩薩という図像は、「立山曼荼羅」諸本の中に、意外にも「立山博物館Ａ本」の他に、はっきりと認識できるものは見られない。

なお、立山博物館Ｂ本【写真30】と相真坊Ａ本には、立山山中で白装束の亡者らしき女性が、僧侶らしき人物に何かを懇願しているような場面が描かれており、おそらく、同じ説話をモチーフにしたものと思われる。

【写真30】女性の亡者が僧延好に懇願する場面（「立山曼荼羅 立山博物館Ｂ本」部分）

おわりに

本稿では、まず「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の場面を抽出し、『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類・配列に依拠して整理を行った。

説話画風の「芦峅寺関係の立山曼荼羅」では、「賽の河原」はすべて（22本／22本）に描かれており、他の尊格と比較する必要はあるものの、芦峅寺衆徒が廻壇配札活動で絵解きをした際に、賽の河原の地蔵信仰を重視して唱導し、檀那場の多くの人々もその話を求めていたことがうかがわれた。

また、山絵図風の「岩峅寺関係の立山曼荼羅」には、信仰上の観念としての地蔵菩薩は描かれることが少ないとはいえ、子どもや石のみ描かれた２本を含め、「賽の河原」は半数以上（８本／14本）に描かれ、地蔵信仰に関わる地名も明記されるなど、立山山中の名所や要所として紹介され、地蔵霊場としての立山の原風景をとどめていると言える。

次に、立山地獄とされた領域の実景と、その実景から生まれた説話や絵画などともに、「立山曼荼羅」を紹介した。

「賽の河原」に関しては、１―１で作成した基礎資料をもとに、地蔵・子ども・石・卒塔婆・鬼の構成要素については、鬼が描かれるのは34本中15本に過ぎず、また、極端な鬼の呵責などが描かれるものは「筒井家本」１本のみであり、鬼は二次的な存在といえそうである。「賽の河原」の図像は、江戸初期にその図像が確立されていたと考えられる「熊野観心十界曼荼羅」の中央部分に描かれるし、独立した一幅の民衆宗教絵画としても残されている。それらの制作年代や図像を詳細に比較検討することで、「立山曼荼羅」の制作時期を知る一つの手がかりが得られるかもしれない。

今後、他の尊格が描かれる場面も抽出して地蔵菩薩の場面と比較検討したり、各地の檀那場の地蔵信仰に関わる絵画とその図像などを調査したりすることで、立山信仰での地蔵信仰を考察するための基礎資料の充実を図りたい。

［謝　辞］

渡浩一氏（明治大学国際日本学部）には、地蔵信仰の歴史、とくに賽の河原の図像について、研究成果を多分に援用させていただき、有益なご教示をいただきました。

また、福江充氏（北陸大学国際コミュニケーション学部）の著作から、多くの知見を得、参考とさせていただきました。

資料調査では、眼目山立山寺ご住職戸田光隆氏より、格別のご協力と写真撮影のご便宜をお図りいただきました。また、資料の掲載に当たって、大野泰秀氏、佐伯節子氏、佐伯宏氏、佐伯睦麿氏、塚原順隆氏、筒井志朗氏、坪井政明氏（五十音順）より、ご配慮をいただきました。

皆様のお名前を挙げて、深く感謝申し上げます。

［主要参考論文・文献］

・渡浩一『お地蔵さまの世界』（慶友社、2011年）
・渡浩一「幼き亡者たちの世界－＜賽の河原＞の図像をめぐって」（『「生と死」の図像学』所収、風間書房、1999年）
・加藤基樹「立山における閻魔信仰―第一部「閻魔の眼光」の展示理念にかえて―」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』所収、富山県［立山博物館］、2016年）
・下坂守『日本の美術　第331号　参詣曼荼羅』（至文堂、1993年）
・多賀康晴「立山の地蔵信仰」（『富山県［立山博物館］研究紀要　第23号』、富山県［立山博物館］、2016年）
・多賀康晴「立山の地蔵信仰（２）」（『富山県［立山博物館］研究紀要　第24号』、富山県［立山博物館］、2017年）
・高野靖彦「近世における地獄表現と「立山地獄」―生きるための地獄が呼び覚まされた時代―」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』所収、富山県［立山博物館］、2016年）
・田村正彦「非日常性と立山地獄」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』所収、富山県［立山博物館］、2016年）
・濱田隆『日本の美術２　第273号　来迎図』（至文堂、1989年）
・速水侑『地蔵信仰』（塙書房、1975年）
・福江充『立山曼荼羅－絵解きと信仰の世界』（法蔵館、2005年）
・福江充『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書店、2018年）
・福江充『近世立山信仰の展開』（岩田書院、2002年）
・福江充「立山信仰資料の翻刻紹介『立山地獄谷伽羅陀山地蔵大菩薩』（大仙坊所蔵）（『人と自然の情報交流誌たてはく』第44号所収、2003年）
・松島健『日本の美術４　第239号　地蔵菩薩像』（至文堂、1986年）
・真鍋広済『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店、1960年発行、1987年重版発行）
・田中久夫『地蔵信仰と民俗』（図書出版、1989年）
・米原寛『立山信仰史研究の諸論点』（桂書房、2018年）
・『平成９年度　立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原』（富山県［立山博物館］、1998年）
・『総覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］、2011年）
・『霊山立山　天空への祈り―修験から民衆登拝、布橋灌頂会まで―』（富山県［立山博物館］、2021年）
・『新 綜覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］、2022年）

［使用写真一覧］

・写真１　賽の河原の地蔵菩薩（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真２　雄山と浄土山
・写真３　二十五菩薩中の地蔵菩薩（「立山曼荼羅相真坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真４　ブロッケン現象（『探検！立山曼荼羅－親子で親しむ立山開山伝説』（富山県［立山博物館］、2002 年）より転載）
・写真５　閻魔堂前の地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真６　芦峅寺閻魔堂
・写真７　銅造地蔵菩薩半跏坐像（観音寺蔵）
・写真８　立山請来地蔵尊御影（観音寺蔵）
・写真９　銅造地蔵菩薩半跏像の蓮華座蓮弁（観音寺蔵）
・写真10　巨大な地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 坪井家Ｂ本」部分、個人蔵）

・写真11　施餓鬼法要（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真12　立山寺の施食棚（立山寺蔵）
・写真13　「立山地獄」刷り物（当館蔵）
・写真14　前掲写真３の部分拡大（「立山曼荼羅 相真坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真16　みくりが池岸辺の子どもたち（「立山曼荼羅 立山博物館Ｂ本」部分、当館蔵）
・写真17　池が燃えている様子（「立山曼荼羅 称念寺Ａ本」部分、称念寺蔵）
・写真18　「立山曼荼羅 大仙坊Ｃ本」部分、大仙坊蔵）
・写真19　「立山曼荼羅 日光坊Ａ本」部分、個人蔵）
・写真20　賽の河原（『平成９年度　立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原』（富山県［立山博物館］、1998年）より転載）
・写真21　賽の河原の保存堂（同上）
・写真22　賽の河原の地蔵石仏（同上）
・写真23　「立山曼荼羅 筒井家本」部分、個人蔵
・写真24　「立山曼荼羅 吉祥坊本」部分、当館蔵
・写真25　地獄谷石造物群（『平成９年度　立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原（富山県［立山博物館］、1998年）より転載）
・写真26　東から伽羅陀山を見る（同上）
・写真27　伽羅陀山保存堂（同上）
・写真28　伽羅陀山地蔵菩薩（同上）
・写真29　地獄谷の身替り地蔵（「立山曼荼羅 立山博物館Ａ本」部分、当館蔵）
・写真30　女性の亡者が僧延好に懇願する場面（「立山曼荼羅 立山博物館Ｂ本」部分、当館蔵）